

令和6年度第1回鳥取県総合教育会議 議事録

1 日 時

令和6年7月17日（水） 午前10時30分から正午まで

2 場 所

鳥取県庁 特別会議室 現地+オンライン会議を実施

3 出席者

知事 平井伸治
教育長 足羽英樹
教育委員 佐伯啓子
教育委員 鱸 俊朗
教育委員 森由美子
教育委員 松本典子
教育委員会事務局 次長 林憲彰
教育委員会事務局 教育次長 長谷川隆
教育委員会事務局 参事監兼高等学校課長 井上祐一郎

有識者委員 大羽沢子
有識者委員 織田澤博樹
有識者委員 門脇友美
有識者委員 坂本哲
有識者委員 山田裕貴
事務局 子ども家庭部長 中西朱実
子ども家庭部総合教育推進課長 木村雄二

4 意見交換

- ・ふるさとキャリア教育の充実について
- ・教科別の学力状況について

5 報告事項

- ・令和新時代の県立高等学校教育の在り方に関する基本方針（令和8年度～令和17年度）について

6 あいさつ

（中西部長）

- ・令和6年度第1回鳥取県総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして、平井知事よりご挨拶をお願いいたします。

(平井知事)

- ・本日は大変お忙しいところ、このようにお集まりいただきましてありがとうございました。教育委員会の委員の皆様に加えまして、大羽先生、また織田澤先生、門脇さん、山田先生、さらには坂本さんはオンラインで繋がっていただいております。こういう外部の委員の皆様の忌憚のないご意見で、住民の皆様、或いは保護者の皆様、子どもたち、そうした現場に近い声をぜひ、教育委員の皆様にも一緒にお聞きいただきまして、これからどういうふう to 本県の子どもたちを育ていこうかと、そういう指針になればというふうに思います。そんな意味で森委員、また松本委員、佐伯委員、鱸委員、足羽教育長はじめ、皆さんにも共有していただきたいということでもあります。
- ・今、私ども地域も含めて日本中が直面しているのは、やっぱり子どもたちがZ世代と言われるような形で成人を迎えてきておりますけども、ただ、やはり生き方が変わってきているのかなということがあります。そういう中でやはり学校教育の中でも、取り組むべき課題というのは幾つか見えていると思われるのが、今の人口減少の問題であります。これには2つのものがある。社会減で圧倒的に東京の方に出ていってしまう、大阪へ出ていってしまうということがある。また、自然減、これは子どもを育てていく。そういう世代から世代へとバトンタッチしていくということについて、その機能が低下しているのではないかとということです。このいずれもが、東アジアに共通してしまっていて、中国でもそう。北京や上海等に集中をしていく。そういう中で圧倒的な少子化が進む。韓国に至っては、もう0.5とかそういうレベルの少子化になっていますが、これもソウルの集中ということが片方あるわけです。どういうわけか、こうした欧米とは違った光景が、我々のこの取り巻く東アジアで共通して見られるわけでありまして。要は、次の世代がどういうふう to 成長して、そして社会で巣立っていくのか、その大切な時期を担う学校教育で、どういうことができるのかっていうのを、やはり我々向き合っていかなければいけないのではないかとこのように思います。
- ・そういうような意味で、今日、例えばふるさとキャリア教育と言われるもの、これは鳥取県で暮らしていく、或いは働いていく、そういう時に、大事な魅力なり、そういう良さというものもやはり共有してもらって、その上で子どもたちが自らの人生を判断していただくということが大切じゃないかということでもあります。そこには、例えばご家庭を持ったりして、家族として、ここで住んでいく、子育てをしていく、そんなことも含めて、やはり鳥取の良さというものも認識していただく必要がある。この辺が、先ほど申しました課題にチャレンジしていくことにもなるのかなというところなんです。
- ・また併せまして、本県では、様々な教育の指導をいただいておりますが、英語について一定の成果が出たということはある中、その他の評価におきまして、学力の低下傾向というのが、残念ながら全国の中で相対的に進んでいると言わざるをえないところあります。かつて鳥取県は、全教科全国平均を上回っていましたが、それは今昔の感がございまして、残念ながら、下回っているということになってきました。ただその片方で、例えば30人学級を今小学校5年生まで進めるなどですね、全国に比べるとその教育環境を整えることへの投資ということは、しっかりやっているはずなのですが、ただ、なぜかその結果に繋がってこない。それはやっぱり教室の中でどういうことが行われているのか、そういうことにも関わっているものではないかとこのように思います。
- ・なかなかわかりにくいことではありますけども、今日お集まりの委員の先生方は、どちらかという to、学校を外から見ている方々でいらっしゃると思いますので、そういう意味でお気づきのこともいろいろとあるのではないかとこのように思うわけでありまして。「物指をもつて遊ぶ子、梅雨の宿」という星

野立子さんの句があります。雨が降っても元気に、家の中で物指を持って、チャンバラをやっているのでしょうか。遊んでいる子どもの姿。そんな元気な子どもたち、これからも健やかに未来に向けて成長していけるよう、今日のこの会議が、その大きな大きな知恵を与えていただくことを我々としてお祈りを申し上げながら、私からの御礼に代えさせていただきます。今日は本当にお忙しいところありがとうございました。

(中西部長)

- ・続きまして、足羽教育長よりお願いいたします。

(足羽教育長)

- ・本日は大変お忙しい中、今年度の第1回総合教育会議にご出席いただきまして、心から感謝申し上げます。日頃から平井知事をはじめ、各有識者委員の皆様方、また、教育委員の皆様方にも本当に鳥取の子どもたちのために、熱い思いを寄せていただいておりますことに心から感謝申し上げます。今、昨今の情勢のことを知事も申されました。本当に急速に進む人口減少の中で、この将来の鳥取県、どんなふうに担っていく人材を育成するのか。本当に大きな課題だろうと思っております。就任以来教育施策の基軸にふるさとキャリア教育を掲げ、いろいろな人生、生き方があるのですが、その根底に必ずこのふるさと鳥取のことが、すべての子どもたちの心にある。そんな教育施策を展開したいと思って、取組を進めて参りました。ちょうど今日の日本海新聞にもありました。県外に出ていく生徒の多い鳥取西高の生徒、1年生全員が県内企業をいろいろ探索しながら、県内の企業を知ろう、その上で自分の生き方を考えよう。普通科も含めた、こういうふうな取組も広げてきたところでございます。また、一方でその下地となる知識の部分、学力の部分は、知事からもご指摘いただいたとおり、英語の上昇はありましたが、やはり基盤となる国語、算数、数学、この辺りを思考力、判断力、表現力、つまり、知識を活用する、応用する力をいかに高めていくか、これが大きな課題だろうというふうに認識をしております。もちろん取組も進めてはおりますが、また委員の皆様方から思い、斬新なご意見、或いはお考えを聞かせていただきながら、今後の教育施策の充実に資するようなものとなるように努めて参りたいと思っております。本日は限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

7 意見交換

(中西部長)

- ・それではお手元に配布しております次第をご覧ください。意見交換に移りたいと思います。本日の議題は、ふるさとキャリア教育の充実、教科別の学力状況、報告事項が令和新時代の県立高等学校教育のあり方に関する基本方針としております。最初に議題と報告事項につきましては、一括して、資料の説明をさせていただきます。それでは、ふるさとキャリア教育の充実について、まず教育委員会から取組状況の説明をお願いいたします。

(長谷川教育次長)

- ・ふるさとキャリア教育の取組について、5ページをご覧ください。このふるさとキャリア教育は、先ほど教育長の冒頭のご挨拶にもありましたが、足羽教育長が就任以来、本県の教育政策の基軸として取り組んできたところでございますが、上段の四角囲みがありますとおり、昨年度末に改定しました、第4次鳥取県教育振興基本計画において、改めてこのふるさとキャリア教育を、本県の教育政策の基軸として位置づけるとともに、この取組が現在の国の教育振興基本計画の重要なコンセプト

でもあります、ウェルビーイング、これを育む具体的な実践例として、文科省のホームページで、本県のふるさとキャリア教育の取組を紹介いただいているところです。我々としてもこの取組が、本県にとってももちろんそうですが、これから国が進めようとしている方向性とも合致している取組であると考えておまして、自信を持って推進していきたいというふうに考えているところです。このふるさとキャリア教育の目的ですが、(1)にありますとおり、鳥取県に誇りと愛着を持ち、ふるさと鳥取をさらに継承、発展させていこうという意欲と気概を持った人材を育成するとしておまして、これまでも、学校では、地域について学んだり、職場体験であったり卒業生や、地域の方から生き方について学んだりしてきたわけです。9ページをご覧くださいますと、そちらの資料で全体像を示しておりますが、その学びを高校卒業までを系統的に繋ぎ、また、地域や社会とも、より深く関わる教育活動を通して、行動力であるとか、自己肯定感を育て、将来自立して、自分らしい生き方を確立する力をつけていきたいというふうに考えておまして、将来様々な場面で、このふるさと鳥取を支えてくれる人材に育てて欲しいと考えております。

- ・6ページをお願いいたします。その具体的な取組として、いくつか載せておりますが、一部ご紹介をさせていただきますと、6ページ中段イの鳥取市立青谷中学校では、地域の資源、例えば、青谷上寺地遺跡や和紙を題材として探究学習に取り組んだり、今朝の新聞記事にもありましたが、青谷高校と連携して、地元の海でサーフィンを行うことなど、こういったことを通してすばらしい自然について学んだりする中で、主体的に地域に関わるような行動につなげていく取組を進めています。
- ・また、7ページの一番上にございます米子市立後藤ヶ丘中学校の取組は、先ほどご紹介しました文部科学省のホームページでも紹介していただいた取組で、地元の企業と一緒に課題解決に取り組む、成果を上げているところです。また同じく7ページ中段の高等学校のイにあります、鳥取夢プロジェクトとして取り組んだ中には、米子市の中心市街地の活性化に向けて、地元の高校生が地域や民間企業の方々と連携して商品開発であるとか、商店街の活性化に向けた店舗の利活用について実証実験を行い、利便性の向上や地域活性化に一役買っているところです。その下のウの米子西高では、米子市と連携協定を結んで、米子市のまちづくりビジョンに関する取組を進めているところです。近年、こういったように探求的な学びが各学校で盛んに取り組まれているところですが、以前に比べて、ICTも活用しながら、さらに課題を深掘りして行って、学校外の方たちとも連携をしながら解決のために一緒に行動していくような、そんな学びにつながられており、そういった意味での探究的な学びとこのふるさとキャリア教育っていうのは、相性がいいのではないかとこのように考えているところです。県の教育委員会としましても、こういった学校の取組を支援したり、情報発信に努めているところで、例えば7ページ下段にあります(2)ア、親子でおしごと体験ツアーを企画し、夏休みに小学校の親子で県内企業を訪問してもらって、見学や体験などを通して、地元のすばらしい企業や地元で働くことの魅力を感じてもらったり、イのCMコンテストでは、学校の学びを多くの方に知っていただきたい、そして、地域のすばらしさを伝えていきたいという目的で、学校に地域を紹介するCM動画を募集したところ、多くの学校から大変すばらしい作品をいただきました。それらを表彰させていただいたり、ケーブルテレビ等でも放送していただいたところです。
- ・8ページをお願いいたします。そして本年度につきましても、3の表にもありますとおり、いろいろな方々からのご協力、ご指導いただきながら、取組をより充実させていきたいというふうに考えているところですし、一番下にも記載をしておりますが、鳥取若者Uターン定住戦略本部とも連携をし

て、若者の意見も踏まえ、一層ふるさとキャリア教育の推進を図っていきたいと考えております。

(中西部長)

- ・続きまして、ふるさとキャリア教育のさらなる充実につきまして、総合教育推進課から説明をお願いいたします。

(木村課長)

- ・資料 11 ページ、資料 1-2、「ふるさとキャリア教育のさらなる充実について」をご覧ください。本県の R5 年の合計特殊出生率や出生数が前年と比べて低下したことから、6 月 25 日に出生率低下対策専門家会議を開催いたしました。出席者の方からは、子どもや子育ては自分には関係ない、或いは、自分が子どもを持つイメージがないといった、高校生や大学生が年々増えているというふうなご意見がございました。こうしたことから、将来のライフスタイルの考察の視点を、ふるさとキャリア教育の学習に盛り込んでどうかと存じます。具体的には下に書いております家庭科での学習の徹底でございます。現在高等学校の家庭科では、男女とも 1 年生で家庭基礎もしくは家庭総合のどちらかで、家庭や家族について学習することが必須となっております。下にシラバスで家庭総合の学習のめあてを抜粋しておりますが、生涯を見通して自分のライフスタイルを考えるですとか、よりよい家庭生活を実現する、仕事と家庭の両立、社会の一員として次世代を育む責任を持つといったようなことを学習してありまして、こうしたことを、キャリア教育における社会的、職業的自立ということとあわせて、重点的に学習する機会を設けていく必要があるのではないかと考えているところでございます。裏面 12 ページをご覧ください。教育に関する大綱を抜粋しておりますが、それまでの大綱を見ますと、大人の視点からの取組ばかりで、子どもが主体となってみずからの将来を見通して、仕事とともに家庭や子育てといったライフスタイルを考える視点が抜けているのではないかと考えるところでございます。

(中西部長)

- ・続きまして、教科別の学力状況について、総合教育推進課と教育委員会から説明をお願いいたします。

(木村課長)

- ・13 ページ、資料 2 をご覧ください。教科別の学力状況についてでございます。大綱におきまして、全国学力学習状況調査の各教科の県の平均について、全国平均を上回ることを指標として考えているところでございます。教科別の学習学力状況を見ますと、まず国語でございます。鳥取県と全国の差をグラフにしたものでございますが、右肩下がりの状況になっておりまして、最近盛り返しておりますが、そういう状況でございます。小学校・中学校とも同じような状況です。算数・数学の状況について、同じように小学校と中学校のグラフを挙げておりますが、ずっと右肩下がりで全国とのポイント差も広がる状況でございます。
- ・14 ページをご覧ください。英語についてでございます。英語の調査は、毎年ではなくて、直近が令和 5 年、その前が平成 31 年でございますが、いずれも全国を大きく下回っているという状況でございます。その下側に CEFR の状況でございます。全国平均を下回る状況でございましたが、高等学校については令和 4 年度から、中学校については令和 5 年度から全国平均を上回る状況になっております。その下、難関国立大学の合格者数でございます。これは目標が未達成になっております。その下の大学等進学率につきましては、目標達成になっております。補足データでございます。全国学

力学習状況調査でございますが、主体的な学びが低下傾向にあって、学習意欲を引き出すような取組が必要ではないかと考えているところでございます。

(長谷川教育次長)

- ・それでは、先ほどご説明のありました状況等を踏まえて、その要因であるとか、対応につきましてご説明させていただきます。15 ページをお願いいたします。まず3の調査結果分析についてですが、以前より本県教育では、基礎的な知識の習得であるとか、基礎学力の定着に、ある面で強みを発揮してきたところがございますが、現在の学習指導要領では、これからの予測困難な時代を踏まえて、そういった基礎的な知識をいかに活用できるかということが一層求められているところです。まさに全国学力学習状況調査の問題も、そういった内容に大きく変化をしておりますが、そこへの対応や改善が結果としては、十分な成果に至っていないという状況があるというふうに思います。そのため、国語や算数・数学につきましては、活用する力の向上に向けて、特に思考力・判断力・表現力といった、出動力を育成するための授業改善について、国の学力調査のまさに中核となってきました、文部科学省の学力調査官を招聘して、学力調査を踏まえた授業改善に取り組んできているところです。また、子どもたち一人一人に応じた指導を一層進めるため、とっとり学力学習状況調査にも取り組んでおります。
- ・英語につきましては、小学校での教科化がスタートしていく中で、英語への魅力を感じている子どもたちも多い一方で、情報をしっかりと読み込んだり、即興でコミュニケーションをとるなど、いくつか課題も見られていますが、特に話すことを中心とした言語活動の指導に、課題や難しさがあると考えておまして、外部資源の活用であるとか、英語でのコミュニケーションの機会の確保に取り組んでいるところでございます。
- ・4の具体的な取組としまして、幾つか紹介をさせていただきますと、国語、算数・数学についてですが、(1) とっとり学力学習状況調査では、小学校4年生から中学校3年生まで実施をしております。経年で子どもたちの学力の伸びを見ていこう。そして、学力の伸びを支える指導のあり方を共有するとともに、非認知能力を育てていこうというものです。(2)の学力調査問題を活用した取組では、例えば①のB-PLANでは、まさに学力調査の問題を、授業の中で取り組めるように教材化をしまして、活用力を育成する授業づくりに取り組んでいるところです。(3)の思考力・判断力・表現力を育成する取組としましては、例えば①では、国の学力調査官をここ数年継続して招いておまして、その指導のもと、いくつかの学校を研究指定校として授業研究に取り組み、その成果を全県に発信しているところです。
- ・16 ページをお願いいたします。英語についてですが、(1) 英検 IBA は、以前からこの会議の中でもご紹介をさせていただいておりますが、中1から中3までが英検協会と連携した外部試験を実施しまして、話す、聞く、読む、書くの4技能について、その状況を客観的に図るとともに、こちらも経年で学力の伸びを見ていこうとしているものです。そしてそういった結果とあわせて(2)では、すべての学校を指導主事が訪問し、実際に授業参観した上で、指導助言を行っております。そういった成果等につきましては、35 ページに参考資料として載せておりますので、また後程ご覧いただければと思います。また話す力の育成のために、16 ページの(3)の、例えば①②にありますとおり、夏休みなどの機会に子どもたちにネイティブスピーカーと触れ合うイベントを開催したり、市町村が配置しておりますALTの研修会であるとか、オンライン英会話への支援を行っております。また、

④では昨年度、教育界のノーベル賞と言われるグローバルティーチャー賞 2023 のトップ 50 に鳥取西高の松田先生が日本で唯一選ばれましたので、本年度中学校の教員を対象に、すぐれた実践と中高連携について研修を行う予定としております。

- ・最後に今後に向けてということで、17 ページの資料をご覧ください。先ほどご説明をさせていただいたような取組をこれまで進めてきているところですが、やはりそれをしっかりと結果に結びつけていくために、本年度より第二期の学力向上推進プランを進めて参ります。このプランでは、先ほどご説明しました、思考力・判断力・表現力の向上を図るために、自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成を目標にして、全国の学力調査、そしてとっとり学力学習状況調査や英検 IBA など、そういったことから得られますデータを大学とも連携して分析を行い、それをもとに専門家による学力向上検討会議を開催し、ご提言をいただきながら、客観的な根拠をもとにした、そして鳥取の子どもたちに合った学力向上策を一層進めて参りたいと考えております。

(中西部長)

- ・続きまして、報告事項の令和新時代の県立高等学校教育のあり方に関する基本方針につきまして、教育委員会から説明をお願いいたします。

(井上参事監)

- ・43 ページをお願いいたします。令和新時代の県立高等学校教育のあり方に関する基本方針、令和 8 年度から令和 17 年度までの 10 年間でございます。これを、令和 6 年 3 月 16 日に策定をいたしましたので、報告をさせていただきます。大きな方針として、基本方針、自分の夢や目標の実現に向けた可能性を広げるために「社会とつながり 体験する 選択できる 新しい学び」を創造していく、ということ掲げております。その下、方針 1、2、3 としまして、生徒一人一人の資質・能力や可能性を最大限伸ばす学びを推進する。将来の地域を支える人材を育てるふるさとキャリア教育を推進する。様々な現代的諸課題に対応し、鳥取県や日本、世界に貢献できる力を育成する学びを推進する。この 3 つの大きな方針を立てております。これは方針 1、方針 2 の学校を作るという意味ではございませんで、この方針 1、2、3 の濃淡の違いはあれ、すべての学校においてこれらのことを意識しながら、教育活動を実践していくということで進めている方針でございます。この方針を実現していくために、今後のあり方について、次のような形で検討していきたいというふうに考えております。
- ・令和 8 年度以降の高校教育改革の方向性につきまして、令和 8 年度から 12 年度までを前期、令和 13 年度から令和 17 年度までを後期とし、それぞれの高校の特色化を推進し、育成したい生徒像を明確化した上で、適正な学校規模及び配置について検討していくこととしております。大きな方針を 44 ページにまとめさせていただいています。44 ページの 3 の新しい姿の高校づくりにあたって、県立高等学校の今後のあり方の基本的な考え方をまとめさせていただきました。学級規模のこと、東中西部地区にバランスよく専門学科、専門的な学びができる学校を置いておくということ、それから本県ならではの資源を生かした特徴的な学科の設置ということはやはり必要であるということ。また、県立高校すべての小規模化、生徒数の減少に伴って、それに応じてすべての学校を小規模化していくということは、学校全体の活力低下ということが危惧されるために、やはり一定規模の高校を配置していくということ。一方で、専門学科、中山間地域の高校においては、環境や学習内容を踏まえた柔軟な定員設定を検討していくということ。少人数学級について、それから今後の中学校卒業生数の減少を踏まえた県外生徒募集について、専門学科の専攻科について、これらのことも踏まえながら、令和

8年度以降の基本計画を今後立てていくよう、今検討しているところでございます。

- ・前期につきましては、令和6年度中に対象学校、それから令和7年度中に教育内容等の詳細を公表すべく現在検討しておるところでございますが、中学校卒業者数の減少等を踏まえ、前期中に240人程度の募集定員減、それから後期の方につきましては、令和10年度を目途に、後期中に480人程度の募集定員減を目途に検討を進めながら、最初に申し上げましたような大きな方針に基づいて、今後の高校教育改革を実現していきたいというふうに考えております。

(中西部長)

- ・ただいま、説明いたしました議題と報告事項につきまして、有識者の皆様からご意見を伺いたいと思います。

(有識者委員)

- ・今のご報告も聞きながら教育委員会の皆さん、関係者の皆さんが非常にいろいろな工夫をされて、ある意味では成果が出ていると思うのです。ただ学力に関しては課題が多いなというところで、今回は3つのキーワード、「減らす」と「動かす」と「渡す」でお話をさせていただきたいと思います。
- ・1つは「減らす」ということで、たくさん取組が出てくるのですが、一方で整理していくことが必要ではないかと思うのです。例えば、さきほどのふるさとキャリア教育について見ると、良い取組がしっかりあるので、それが毎年あるものとする、学校のカリキュラムをつくりやすいと思うわけです。毎年CMの募集があるから、何年生のこの時期にはこれに申し込もうというのを、カリキュラムの中に落とし込んで、総合的な学習の時間に位置づけるというのを、毎年学校の中で、誰が来ても、何かそこに関われるようにしないと、新採の教員が来た時に、そういうものにどう取り組めばいいのかは、すごく負荷がかかると思うわけです。だから、学校の指導計画の中にどれぐらい位置づいているのかというのを、各学校で工夫していく必要があるのかなと思います。そうしないと、毎年毎年何か新しいことが出てくる、学校は対応する、それについて年間計画どうしようかというところから始めると、非常に負荷が高いと思います。それについて、いろいろな資料や計画については、今どうでしょうか、この先生方AI活用とかどれぐらいされているのでしょうか。そういうのも含めて先生方の負荷を少なくして持続的にいろいろないい取組にアクセスできるような現場にしていただければありがたいと思います。
- ・2点目の「動かす」というところは、15ページに先生方の意識改革を促すとあるのですが、意識なかなか変わらないです。鳥取県の先生方は、どれぐらい県外の情報を実際に見に行っているのかなと思います。私も現職の教員の時に、いろいろなところに派遣してもらって、新しい教育、新しい地域の教育を見て、それを他の先生方に還元するという、私だけでなく、いろいろな若手の教員も研究させていただいたことがあります。それが、次の世代どうしていくかという目標になる。だから、鳥取県内に居ることも大事ですが、やっぱり県外にどれぐらい触れているのかというところを考えていただけたらいいかなと思います。それには、お金を動かすということが要るので、動かしてもらいたいかなと思っています。
- ・それから「渡す」というところですが、これらの計画、取組というのはすごく良いのですが、現場の先生のお声を聞くと、もう次から次に何でもかんでも入ってしまっていて、もうどこから取り組んだらいいのか、何を重点にしたらいいのかというのが錯綜しているようなので、やはり学校は、学校支援員の活動、活用や、マネジメントをどうするか、或いは若手の先生、新採の先生方が、もう1ヶ月で

やめたくなくなるような業務量というのは考えないといけないかなと思うので、教員でなくても良い仕事をもっと見つけて渡していくことが必要かなと思います。

- ・私は鳥取県の教育は、非常に丁寧で暖かくていいなと思うのですが、やはり世の中の物差しが違って来たと思います。だから、知識をきちんと身につけるといようなことは良かったと思うのですが、アクティブラーニングとかもきちんと取り入れて、今流行りの「はて？」というのを大事にしてくれる先生たちで、「はて？」と思った子どもを中心に学びが作られていくような学校だったら、大変嬉しいなと思っています。

(有識者委員)

- ・まず、ふるさとキャリア教育についてですが、5 ページ以降様々な学校による取組が紹介されていて、地域との接続が増え、地域をテーマとした学習が大分進んできていると思います。次はどういうフェーズに移っていくかということ、教育の中身だと思います。特に 5 ページの中段に、ふるさとキャリア教育を目指す人材像とありますが、この 4 つの視点を教育内容に取り入れていかなければならないと思います。
- ・1 つ目はグローバル、これは多様性だと思います。2 つ目は、「継承・発展」とありますのでサステナビリティ、持続可能性だと思います。3 つ目は、「価値を創造」ですから、クリエイティビティだと思います。4 つ目は、自分らしい生き方ということで、これは広義の福祉になると思いますが、ウェルビーイングなのかなと思います。ですから、ふるさとキャリア教育の、グローバル、それからサステナビリティ、クリエイティビティ、ウェルビーイング、この 4 つの視点のスキル育成やマインドの醸成をどうやってカリキュラムの中に編成していくかが次のフェーズのポイントだと思っています。さらに付け加えますと、鳥取ならではの教育にその 4 つの視点をのせると、さらにいいものができると思います。例えば、兵庫県の豊岡市は演劇教育の取組を市内の学校でされています。演劇教育によって、対話力、対人関係能力を磨き、その力でふるさと教育をしていくという大きな流れができていると思うので、ぜひ鳥取もそのような流れを築いてほしいです。鳥取ならではの時に、どういうものがあるかと想像しますと、例えば、図書教育が挙げられます。私は青翔開智を作る際に全国の学校へ視察に出かけましたが、行く先々で「鳥取は図書教育が盛んですね。」と言われたことを記憶しております。鳥取は図書教育、ということが県外にまで知れ渡っていますので、それを使わない手はないと思います。
- ・また、倉吉に県立の美術館ができますので、アート教育も候補の一つになるかと思っています。図書やアートをベースにし、そこにさきほどの 4 つの視点を織り交ぜながらカリキュラム作成ができれば、このふるさとキャリア教育の次のステップが大きく発展していくのではないかと考えております。
- ・次は、特別支援に限定した話をしたいと思います。私は聾学校のコミュニティスクールの委員をさせていただいておりまして、交流もたくさんさせてもらっています。お隣の盲学校さんも、本校の近くにあり、交流させてもらっています。聾学校や盲学校は生徒が少なく、学年に 1 人しかいないとか、中学校に 1 人しかいないという時もあります。その状況で高校まで進級し、卒業していきなり社会に出ることなので、保護者の皆さんは、高校を出た後、たくさんの社会の人達と一緒にやっていけるのかと不安になられているので、ぜひこのキャリア教育をするに当たって、特別支援の生徒さんを外に出す機会を多くとり、たくさんの人と触れ合わせる機会を、学校任せにせず、教育委員会さんの方で特に力を入れて支援をしてあげていただきたいなと考えております。

- ・また、今日の議題からそれるのですが、大綱に記載があるのでお話しします。施設の老朽化、特にプールの老朽化がすごくて、ぜひそこに何か手だてをしていただければと思います。聾学校、盲学校の先生の努力により学校はすごく綺麗です。ハンデがある生徒さんが通われているので、物にぶつからないよう整理整頓され、清掃も行き届いております。日頃からものすごく綺麗にされているのですが、やはり老朽化はどうしようもできませんので、何とかそこに手当をしていただけるといいのかなと思いました。
- ・学力の方は、いろいろな先生からご意見あると思いますが、クラス規模が小さくなることで学習効果が上がるかどうかという研究が様々なされております。クラス規模が小さくなるからといって、学習効率が上がるかというとそうでもなく、クラス規模に応じた指導方法というものがあります。学習規模が小さくなることと、それに見合った指導方法をセットで提供しないと効果が発揮されませんから、ぜひそこを人口減少のペースよりも早くやっていただいて、この学力が何とか持ちこたえられるようになればいいのではないかと考えております。

(有識者委員)

- ・子どもがいますので学力低下は気になる場所ですが、今回の会で一番気になるのはふるさとキャリア教育についてです。やはり今、SNSなどで都会の情報がどんどん発信されますし、都会に憧れる子は増えていくと思うのですけれども、その中で、鳥取はいいところだよと言っても都会に憧れる気持ちをなかなか押さえられないと思います。資料 6 ページにある、ブドウハウスの教育を、うちの子もこの間体験したばかりなのですからけれども、子どもが学校から帰ってきた時に話してくれるのは、こういう地域の方がしてくださる活動であったり、体験であったり、それが楽しかった、地域の方に褒めてもらえたという、先生や親以外の人に褒められるという経験がとても重要だと思っています。コミュニティスクールとかそういう活動はとても重要だと日頃から考えております。こういう教育や体験をした子が、例えば都会に出て、ふと思い出すことは、そういえば小さい頃にこういうことしたな、鳥取は良いところだったなということだと思う。やはり、こういう経験をさせることが必要であり、どんどんこういう体験を子どもにさせていきたいと思い、私もPTAを通じて地域活性の活動にも参加させてもらっています。昨日も、地元の中学校で、地域の方と保護者、中学生と小学校 6 年生の子が、大トーク大会という地域に関して皆で話し合うという会をしたのですが、そういう大人の意見を聴ける場とか、大人が子どもの意見を聴ける場、こういう事を大事にしていいたら、自然と鳥取はいいところだなと感じられ、そういう場がすごく必要だと思っています。

(有識者委員)

- ・私の方からは民間企業の立場ということで、キャリア教育の部分、地元企業への就職など、その辺のお話をさせていただければと思います。まず全体的にこのキャリア教育の中で、いろいろな活動、施策が行われていて、これに関しては非常によくやっている方なのだろうなと思っていますし、私自身もその実感はあります。ただ、根本的なところをきちんと見ないといけないなと思っています。鳥取が嫌いだという子どもは、正直あまりいないと思っています。私が接している中でも、比較的鳥取のことはみんな好きだし、いいところだと認識はしている。けれども、結果的には県外に出ていくということになっています。
- ・その要因として、何が考えられるのだろうかといった時に、実は親とか、先生も含めて、周りの大人の方々からの影響というのが実は非常に大きいのだろうと思っています。子どもに対してのこういう

キャリア教育というのは、おそらく時代に合わせて工夫していく必要があるとはいえ、十分になされているのだらうと思っているのですが、その反面、本当に大人たちが、鳥取の企業がすばらしいよ、魅力があるよ、じゃあ鳥取に残って、鳥取の企業に就職しようねというふうに本当に思っているかという、実際は結構ギャップがあるのではないかと思います。これは総合教育会議の趣旨とはずれてしまうかもしれないのですが、子どもたちというより、大人たち、親を中心に、あと学校の先生たちも、もう一度この地元へのUターン、就職という課題意識をしっかりと持ち、大人の発信が増えていくと、子どもたちも別に鳥取が嫌いなわけではないので、自然と本人たちもその気になっていくのではないかと思います。実際、我々も民間企業として学校の先生に働きかけに行ったりしているのですが、なかなかそこに対して積極的ではないのは、結果的に大人の方。さっきの有名大学の話もそうなのですが、それなりの難関大学に行かせようとする、結果、それは県外ですよという話になる。それだけの大学に行ってしまうあたり前ですけど、もっと活躍できる場所があるということで、普通に首都圏の企業さんで活躍していくという動きもありますし、親御さんも先生も、結果的には鳥取の中小企業に就職するぐらいだったら、やっぱり都会にある名前の通った有名企業さん、上場企業さんに就職して欲しいと思ってしまうと思うのですよね。ここが一番、課題解決のポイントになっているのではないかと思います。実は子どもたちというよりは、大人たち側への発信や意識改革というのが、これに関しては求められていると思っています。

- ・あとは、これも総合教育会議の課題ではないのかもしれないのですが、県外へ出て行った子どもたちへの県内企業の魅力発信というのは、なかなかこの県内だけでやっても、そもそも帰ってこない。合同企業説明会など、ここ最近だと120~130社が出展しても、来る学生が100人に満たないという状況。それは、なかなか鳥取に帰ってきてまで合同企業説明会に出ようということにはなっていないのだらうというのがあるので、例えば、鳥取の子が多い関西圏とか、そういうところでの合同企業説明会に参加するための費用に対して助成をしていくとか、できるだけ県外でも、鳥取の企業が、学生たちに魅力発信できるような場所というのを提供していくのも1つ、施策としてはありえるかなというふうに思いました。

(有識者委員)

- ・私からは、ふるさとキャリア教育、学力状況について意見させていただきます。まず、資料1-1、6ページの学校ごとの取組み方についてです。基本的には勉強面しか見ていないので、このような多岐にわたる取組をしていたのは知りませんでした。私自身、兵庫や京都、千葉県に住んだ経験がありますが、地元の鳥取が一番背伸びをせず、自分らしく生き、住むことができると感じています。私はまだ知らない、若者世代から見た魅力や、豊かな発想から生まれる視点や気づきもあるため、私も参加したいぐらいに感じました。勉強以外にも、こうした日常か得られる学びを生かして、コミュニケーションをとりながら、またプレゼン力なども鍛えられ、さらに実践を高く育むことができる、とてもいい取組だと感じました。
- ・次に資料1-2、11ページのふるさとキャリア教育についてです。先ほどの資料1-1とも繋がりますが、私や学校の先生などのように、勉強を将来の職業にするというのは少ない方かなと思います。大事なのは、勉強を通して論理的思考や表現力、問題解決能力を鍛えることだと思っています。大人になる前から自立心を育む勉強を通して、PDCAサイクルが意識できると、より良い人生を切り開くきっかけになると思います。加えるとすると、2022年から金融教育が高校でも始まっている

というニュースを見たことがあります。以前より、電子マネーとかアプリゲームへの課金が身近になっていること。投資や税金など、大人になってから、いきなり知るというのではなくて、早いうちから、金融知識や金融リテラシーも見つけることが、トラブル回避、将来に役立つように思います。単にお金の投資だけに限らず、自分への投資、また時間への投資も含めて、役立つかなと思います。

- ・そして資料 2、13 ページからの学力状況についてです。学力状況に限らず、定期テストでも入試でも知識を問う問題はもちろん出題されていますが、その知識を使う、いかに思考力、判断力、表現力を問うかが大事になってきています。この部分を解くためには、知識が備わっているという前提で応用問題を解いていくため、考え方だとか、本質の部分を理解、定着させていないと、解くのは困難だと感じています。これを限られた時間、また様々な生徒がいる環境の中で、すべて 1 人で行うのは難しいと思います。そこで知識部分についてはやはり、ICT の活用が最も効果的だと感じています。宿題の一部を ICT に置き換えることで、知識系である一答形式の問題、指導、定着度合いは、効率よく行えるかなと思います。その生徒ごとの結果をもとに、人が指導することで、正答率の低い問題まで解けるような柔軟な発想力も生まれやすいはずで、人だけ、または ICT を使う、使わせっ放し、もしくは ICT の持ち腐れではなくて、人×ICT、この掛け算をすることこそが、最大限効果を発揮でき、今後の課題を解決する方式だと思っています。
- ・最後に参考資料 2、35 ページの英語についてです。英検取得が増えているようですが、全国学力調査では、全国平均よりも大きく下回るなど、これに限らず、定期テストでも以前はボリュームゾーンが真ん中にある山なりの形から、今は谷のようなイメージのグラフになるなど、数字以上に二極化が進んでいると危機感また課題感を持っています。英検を取得していたとしても、少し踏み込んだ質問をすると、英語の核の部分、本質を捉えきれていない生徒が多いように感じています。その場限りではなくて、こちらの思考力、判断力を鍛え、また大学受験ではさらに情報処理の練習にも時間を割く必要があるので、これらをしっかり行っていくと、英語についても底上げがさらにできるのではないかと思います。学校の先生も、英語力というのは増しているのですが、例えば文法問題であれば、正解の根拠まで、間違いの選択肢も自信を持ってみせるぐらいに本質を捉えたような、生きた英語の指導を行い、英語力向上のサポートができたかと思っています。また、14 ページにもあったのですが、難関大への合格がすべてではないかと思っていますが、目標にもあった難関大の合格にはやっぱり英語が必須かと思っています。今年、旧帝大とか難関大と言われるところを目指している生徒は、県内生徒ではなくて、オンラインの県外生徒にはなるのですが、鳥取県内の合格を目指せるように、東大生、京大生、医学部生とも連携をとり、何度も開設が可能な体制というのは、ICT の力で取っています。鳥取県は浪人率も高く、また共通テストの全国平均と比べても低いというデータも見ました。この志望校であっても生徒に ICT×人、この力に寄り添い、第 1 志望合格、また、鳥取県の教育を変えていけたかと思っています。

(中西部長)

- ・続きまして、教育委員の皆様からご発言をお願いいたします。

(教育委員)

- ・ふるさとキャリア教育に関する事で、2つお話させていただこうと思います。この鳥取県のふるさとキャリア教育は、高校での探究学習にもつなげることも体系的に考えられて、実践されていると思います。その延長にある大学生の 1 つの現象として聞いていただきたいのですが、学力の二極化の

話がありましたけれども、このキャリア、自立ということに関しても、意識の面で二極化が鮮明になってきているような気がしています。学生がいざ就職だ、進学だと考える際、大半がその意識は高く、積極的に活動に取り組もうとするのですけれども、一方で、全く真逆の、そういう活動にはまるで自分は関係ないというような様子の、数は少ないのですが、やっぱりいるのですね。以前からいたと思うのですけれども、それが少しずつ増えてきているような気がしています。これが多分、本学だけの状況ではなくて、よその大学でも見られる傾向ではないかと思っています。そうすると大学は、これまで以上にキャリア教育に力を入れようと考えて実践するのですが、動かないのです。就職ばかりが目的ではないのだけれども、そういうことをしっかり考えさせようという時に、このキャリアパスポートが1つの手だてになるのではないかと考えています。いろいろな体験をする、そのやったこと、或いはその時に感じたこと、これを文字化して、書き留めていくという作業は、特に高校生あたりになると、その時は面倒だと思うのだろうなどは感じるのですけれども、このことをきっちりルーティン化させていくことができると、自分を振り返る或いは見つめる、そういう1つの手だてになると考えていますので、これを充実させていただけるといいなと思っています。そして必ず、手元に残して欲しい、高校卒業後も手元に残して、自分のそばにあるという状況を作っていただけるといいなと思います。

- ・もう1つは、何か言葉尻を捕らえるような感じなのですが、この資料をいただいて、ざーっと目を通した時に、「はて？」と思ったのが、32ページ、自分には良いところがあると思いますかという設問の項目。ここで思ったのが、実績の数値とかではなく今後の課題のところには自己肯定感との繋がりが書いてある。確かにふるさとキャリア教育、これによって自己肯定感につなげるというのは、1つの柱ではあるとは思いますが、そもそも自己肯定感というのは、学校生活全体、家庭生活も含めて、全体で育むものだと思うし、例えばクラブ活動だとか生徒会活動だとか、いろいろな学校行事への取組だとか、そういったものもすごく大きな要因になると思うので、今日のテーマがふるさとキャリア教育だから、強調して書いてあるのはもちろんわかるのですけれども、ここだけを見ると、ちょっと狭い感じを印象として持ちました。

(教育委員)

- ・本当に印象的でしたのは、やはり「減らす、動かす、渡す」ですとか、グローバリティ、サステナビリティ、クリエイティビティ、ウェルビーイング等、いろいろなカテゴリーを1つの整理の仕方、そういった視点で整理をして、このふるさとキャリア教育を見るということですか、子育てに向けた見方をするだとか、少し角度を変えてみるとちょっと違って見えてくるという印象をとっても受けました。そして、鳥取県の強みという部分で、図書教育というお話もありましたし、アート教育というものもありました。私も去年中国5県の教育委員会の集まりの中で、鳥取県の取組の図書教育に関しては、非常に高い関心を持ってくださったという印象は残っております。その中でも、読み聞かせの資格取得ができて、いろいろなどころに出かけていくような資格認定の制度があるとか、そういったことに対して非常に大きな興味を持っていただきました。そして朝の読書活動のパーセンテージにおいても、中国五県の中では断トツでして、図書教育に関しての質問が多く出ました。演劇という部分に関しましても、中島委員もそれを強く、会の中でもおっしゃることが多く、確かにいろいろな形で幅広の可能性があるということを改めて感じた次第です。
- ・そして、ふるさとキャリア教育で、子どもがおうちに帰ってお話するという内容の中に、やはり地域

の方から褒められたという体験が非常に強く残っているというのは、確かにその印象はあるなど私もふと考えさせられました。同じような環境で育てていても、個性は様々です。例えば、この子はこういうことが得意だ、この子はこういうことが好きなのだというのが、それぞれ子どもにあるはずで、その強みを見つけてあげる。一人っ子のお母様とお話をしている時に、自分が感じてないことをこの子が感じている時に非常に不安感を持たれていて、お子様が少ないお母様ほど非常に不安を抱えていらっしゃるということを感じています。やはりそうではなくて個性なのだとかその子どもさんの強みだとか、そういったこととして捉えるような投げかけというのも、今、非常にお子さんが少なくなっていますので、そういう寄り添い方もしていけないといけないというふうに感じています。

- ・そして、大人が地元の企業を知らないという盲点が非常にございまして、中小企業も合わせますと本当にたくさんの企業があるのですが、意外と大人が知らないのですね。どんな会社、何をしているかも知らない。会社名は何となく知っていても、中身は少ししか知らないという実態がありますので、確かに大人が地元の企業を知るという機会は、何かしら増やしていきたいなど、普段から最近は思っておりまして。
- ・また、金融リテラシーの話が出ました。これは本当にいち早くやらなければならないと思います。国の訴えかけられるテーマの中にそういったものがどんどん盛り込まれていて、世界中がそれは同じ方向に向かっていると思いますので、本当に置き去りになる可能性もあるのではないかと、我が子を見ていても思う時があります。Pay Payのポイントで運用させたりとか、何か本当に手軽なことで、肌感で感じるような機会を、学校の中で何かしらあって欲しいなというのは、同じように痛感しておったところでもございました。本当に様々なお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

(教育委員)

- ・私もふるさとキャリア教育は教育振興基本計画の軸であり重要な教育テーマと考えています。この教育テーマが導入されて十数年経過しましたが、いろいろな切り口で今までの取組の評価が必要な時期ではないでしょうか。小学校段階から発達段階に応じて実施されているこのテーマについて家庭の中にどの程度関心をもって理解されているのか。ふるさとのイベントへの参加がどの程度なのか。すなわち御家庭の中でのふるさとキャリア教育に対する認知度はどうなのでしょう。また地域の中でのこのテーマに対する理解度についても評価が必要と考えます。すなわち学校教育と地域の認知度が並行してこのテーマが進んでいくことが大切であると考えます。そのためにも教育委員会と知事部局がそれぞれの役割をもってふるさとキャリア教育を発展させて意味あるものにしていく必要があると考えます。
- ・話は変わりますが、特別支援教育においてインクルーシブ教育は重要なテーマです。私が総合療育センターにおりました時、生活介護事業で利用者が皆生の町中に出行くケースがございました。その結果いつもお世話になっていた喫茶店が、入り口を広く両開きのドアに代えていただいたり、リクライニング車いすが店内に入りやすいように配慮した間取りに代えていただいたことがあり感動した経験がございます。特別支援学校のふるさと教育においても、子どもたちが社会に出ていく取組をひろげ、近くの街並みを舞台に展開するのもふるさとキャリア教育の一つと考えます。
- ・高等学校の再編問題についてですが、社会の大きな変化と急激な少子化の中でも将来にわたって高

校教育の学びの質を保障した再編、整備、統合でなければならないと考えています。新たな学びの推進と新たな高校づくりを車の両輪と考えて改革する必要があると考えます。本県の中学生の数の減少割合をみると具体的には平成元年から令和6年まで生徒数はほぼ半減しており、学びの質の維持向上を考えると再編、整備、統合は必須です。また市部には大規模私立高校が配置される中、県立高校の小規模化は県立高校の質の低下、活力の低下につながり配慮が必要と考えます。逆に専門学科と中山間地域の高校においては地域の実情や環境、学習内容を踏まえ柔軟な定数設定も必要と考えます。有識者委員の皆様におかれましては、本日は本当に貴重な御意見ありがとうございました。

(教育委員)

- ・まずはふるさとキャリア教育の充実について、少しお話をしたいと思います。主体的に学び、自己の生き方について考えられる児童生徒の育成ということが今大変求められておりますので、ふるさとキャリア教育を学校教育の根幹に据えて取組を進めていって欲しいと願っているところです。今コミュニティスクールの取組が全県的に進んできておりまして、身近な地域のよさとか課題について考えられる機会が以前に比べると増してきているのではないかなと思っています。こういう交流とか、体験活動を通して、共に協働して取り組むことのよさを知り、考えたことを自分の言葉で表現することで、達成感や自己有用感が得られるのではないかなと思っています。この1つ1つの取組が単発で点として終わることがないように、学習や活動の後での振り返りを大切にして欲しいと思っています。この振り返りの過程で、得られた成果を実感したり、自覚したり、新たな課題が見つかったりするのではないかなと思っています。先ほど保護者の方からも感想としてあったのですが、子どもたちにとっては自信になりますし、次のステップに繋がっていくのだらうなというふうに思っています。そのために、小学校から高等学校までずっと引き継いでいくキャリアパスポートというのは非常にこの活用が欠かせないものになるのだらうな。これは出来た当時からずっと私は関心持っているのですが、ただ現場の先生方がどれぐらいその重要性というか、子どもたちのためになるという意識を持って活用してくださっているのかというところをこれからも知っていきたいと思っています。このような活動を通して自分に対する理解というのが深まっていくと、高校への進路という時に、多分、目的意識を持って、選択できるようになるのではないかなと思っていますので、そういうような生かし方ができたらなと思います。少し前に新聞に記事が載っておりまして、小学4年生だったでしょうか。1人1台の端末を使って学んできたことを記事にしようと取り組んでおりました。ICTの活用によって、自分が表現したいと思う内容が、以前よりもすごく効果的に紙面が作れていまして、でき上がった時の子どもたちの表情が大変生き生きとしていました。こういう自分の考えをまとめて発信するというような活動は達成感が得られますし、また地域の方にとっては、総合学習とか職場体験などでやった子どもたちが、地域のことに関心を持ってくれた、またその発信した内容を見られて、交流してやっぱりよかったなという実感に繋がっていくのではないかなと思っています。このようにふるさとキャリア教育というのは、児童生徒の非認知能力を育成していく上で、とても欠かせないものになっているなというふうに思っています。
- ・次に教科別の学力状況についてですが、国語、算数、数学ともには、現場での先生方は日々研修しておられますし、県の教育委員会からも、全校を訪問して授業づくりが進められてきておりますので、少しずつ成果が出てきているというふうに私は思っています。ただ授業の転換を図るということ

はそんなに容易なことではありません。今求められている力を育成するためには、取り組みつつあるこの意図的な取組を学校全体で組織的に継続するということがとても大切だと思っています。英語も含めてなんですけども、やっぱりICTの活用というのがさらに進んでいかなきゃいけないということを思っています。デジタル教科書というのが新聞にも載っていたのですが、活用状況が、もうひとつだなというふうに私は感じておりまして、これからどのように進んでいくのか大変関心を持っているところです。もちろん紙の教科書の良さというのがありますので、併用していくのですが、児童生徒というのは、それぞれ適性とか実態というのが違いますので、自主的にどちらでやるのかということが選択でき、学習内容の理解が深まるような活用につなげていくべきなので、そういうデジタル教科書の活用というのは、大変期待しているところです。

- ・それから今家庭への端末の持ち帰りというのも進んできております。基礎的な学習内容の定着について先ほどご意見もあったのですが、個人個人のドリル的な学習もすぐにそれが正解だったか、フィードバックが早いので、自分でもわかっているとか、間違っていたのだということがすぐにわかります。そういうことをしながらでも取り組める基礎的な学力の面での効果があるなと思っています。
- ・それから英語についてですけども、言語活動とか話すことというのが、教育委員会の方からも意見がありました。気になっていることでして、ALTの方とのチームティーチングがそれぞれのALTの方にもよると思うのですが、もう少し進んでいってチームティーチングがより効果的になっていったらいいなと思います。それから、ネイティブスピーカーとの直接的な会話は、これは学校現場で工夫して欲しいのですが、授業以外の活動の中でも、そういう会話が進んでいくと、自分の話すことに自信が持てるようになるのではないかなと思っています。学校規模によってALTの方が授業に関わる時間数に差が出ないような配置を私は希望しています。それから英語に関しては小学校から中学校への引き継ぎもとても大切で、英語を学ぶ意欲が継続する、間違えることを恐れないで、英語を使って話してみたいとか、自分の気持ちや考え方を伝え、理解し合いたいという思いが抱けるような授業づくりがさらに進んでいって欲しいと思っています。
- ・また中学生の家庭学習の状況とか、将来の夢や目標を持っている割合というのが気になりました。学ぶ意欲とか自己肯定感の向上を念頭に置いて、子どもたち一人一人の学力の状況、こういうところがあなたは強いところだよとか、こういうところがちょっと弱いからもう少し努力していかないといけないねというような、肯定的に捉えられるような、個人面談を実施して、中学生が自分の意識を変容して、もっと学習してみたいとか、自分はこういう強みを生かしていきたいと思えるような、そういうふうに個に応じた関わり方というのをしていって欲しいと思っています。
- ・最後に、ふるさとキャリア教育で培う非認知能力というのは、学力向上には欠かせないものだなと思っています。学びに向かう姿勢、これがないとやっぱり学力は伸びていかないと思っています。そういう姿勢とか、粘り強く努力すること、人と比べるのではなくて自分の持っている良さを知ること、自分も周りの人も大切にしたいと思う気持ちが持てること、そういうことがこれからの社会を生きていく上で欠かせないものだと考えています。

(中西部長)

- ・それでは足羽教育長、お願いします。

(足羽教育長)

- ・有識者委員の皆様方、教育委員の皆様方から、非常に熱い思いを今回聞かせていただきました。
- ・まず「減らす」「動かす」「渡す」、本当に私も同感でございます。現場の先生方が本当に苦勞して頑張っている中で、どんなふうにしたら効率的・効果的な教育活動になるのかという意味で、大変大切な視点だろうと思います。最初の「減らす」の計画性あるものにとというのは、まさしく資料の 9 ページ、このふるさとキャリアって謳うだけではなく、これをどう繋いでいくのか。それぞれの発達段階に応じてやっていることが、次にバトンはこう渡るのだよということを先生方に意識していただく。そういう意味でこれも作り上げたものでございます。このあたりがいかに先生方の意識、なかなか意識を変えるのが難しいとおっしゃいましたが、そこに落とし込んでいくことなのだろうと思います。「動かす」の中で県外の施策に学ぶことがありましたが、コロナもあって、県外視察というのが非常に少なくなっはきましたが、逆にオンライン研修も増えてきております。それから昨年度からは、若い先生方、自主的にいきたいところを選んで 1 週間行っていただいて、学びを持ち帰り、広げるというふうな取組を進めているところでございます。また今後、コロナの状況も踏まえましてではあります、県外に学ぶということは進めて参りたいと思います。
- ・また、ふるさとキャリア教育の次のステップを考えるべきという、非常に貴重な意見をいただきました。図書教育、あるいはアート教育、まさしくこの目指す人間像も明確にわかりやすく発信しようということで整理をしたものですが、これが先ほどあったような教育課程、カリキュラムを計画の中にどう落とし込まれていくのかということが非常に大事なというふうに思っておりますので、今後その中身のさらなる充実に検討を進めて参りたいと思います。また、特別支援教育のことにもちょっと触れていただきましたが、確かに特別支援学校の生徒たちも本当に頑張っています。全校が今、地域と繋がる取組を推進しております。例えば、昨日もそうでしたが、皆生養護学校の生徒と境港総合技術高校の生徒が、ボッチャですとか、ボウリング大会での交流をしております。また白兔養護の生徒が、県庁の方で、実習で作った作品を販売して、社会の人とにかく触れ合いながら、関わりながら、というふうな取組を進めているところでございます。また、鳥聾の生徒、昨年、卒業生が鳥取大学に合格しまして、その際には鳥取東高校の入試対策ということで、一緒に学んだというふうな、そんな関わりを持ってきておりますので、特別支援教育のそうした広がり、深まりということにも留意して参りたいと思います。
- ・北条町大トーク大会のお話をいただきました。私も町民として、ぜひいつか参加してみたいなと思っておりますけれども、おっしゃるとおり、地域の方々から認められる、繋がるってことの大切さ、本当にこれも大事なことで、子どもたちの意識が高まります。資料 8 ページにあります、中学生トークプログラム、上から 2 つ目エですが、これがまさしく、そういうことを企画した取組も進めているところで、この自己発見や、或いは生き方に非常に肯定的な考えが、中学生が大学生や地域の方と一緒に考える機会を持つことで、成長を遂げております。ぜひこのあたりの取組、深めて、強めて参りたいと思います。
- ・ふるさとキャリア教育について、根本を見ることが大事、鳥取が好きなのだけど、結果はどうかという大人への働きかけのことをいただきました。ありがとうございました。ふるさとキャリア教育フェスティバルを昨年スタートしましたが、その中で、お仕事体験ツアーを、東中西各 15 組ずつでしたが、昨年、再スタートさせました。100 人ぐらいの親子で参加していただいて、このふるさとの鳥取企業の魅力を実際に体験していただく、そういうふうなことを通して、大人への働きかけ、意識、

私も全く同感でございます。県外出ていいよ、で済ますのではなくて、その子どもたちに鳥取のよさを、やはり周囲の大人、保護者、もちろん教員がどう伝えていくか、ここは本当にキーだなというふうに思っております。

- ・最後に金融教育のことがありました。小中学校の方からやはり租税教室も含めて、取組をより進めていくことが必要だろうと思えますし、高校では全校が社会と繋がる教育を展開しているところがございます。またICTの活用につきましても、4年前からeラーニング教材を、補助事業として全市町村が導入しておられて、授業の中、或いは宿題でも活用されていらっしゃると思いますので、その辺りのより効果的な活用を促していくような仕掛けを考えて参りたいと思えます。貴重なご意見をたくさんいただいたことを心から感謝申し上げます。

(中西部長)

- ・それでは最後になりますが、平井知事より御挨拶をお願いいたします。

(平井知事)

- ・今日は様々なご意見いただきましてありがとうございました。今、教育長の方で取りまとめをさせていただきましたが、1つ1つのご意見は示唆に富むものでございまして、これから教育行政に反映していただくように申し上げたいと思えます。我々知事部局もしっかり手をとっていきたいというふうに思えます。
- ・キャリア教育のお話、テーマが今日は多かったわけですが、やはりこれは社会全体で取り組まなきゃいけないというのが多分、今日の皆さんの共通するところだと思います。それは例えば、コミュニティスクールを活かすというアイデアもございましたし、いろいろと体験を積むということこそが、大変重要ではないかというお話でございまして、それで、例えば東京や大阪に学びに行っても帰ってくる、ということを考えれば、多分そうした大都市部でも、企業と接点を持てるような、そういう説明会の改善とかも含めて、やっていくべきなのだと思います。以前、地方創生をみんなで議論し始めた頃、JAの人が言っていましたけれども、やっぱり家庭の問題もあるということも言っていました。ずばりですね。家の中で、農業だけはやめた方がいいとは言わないでくれと。JAの人が言ったのですけども。でも、そういう意識は我々の中に、心の中にやっぱりあるのでしょうか。社会全体が変わって行って、価値観自体、転換していかないと、本当はもう根っこのところが改まっていかないのだろうというふうに思えます。
- ・そんな意味で、実は県の方では、教育委員会もご協力をいただいて、Uターンを進めるための戦略本部というのを作って、これ親御さんにもアプリなどで、例えばこんな企業があるよとか、そうしたことを積極的に見ていただくようにしたり、また学校の方でも、卒業生をその後受けていただけるようなことをやる必要があるというふうに、実はZ世代の若い人たちが言っています。鳥取県に欠けているのは、ふるさと教育はある程度できているかもしれないけれども、問題はその背景にある社会の方が大事なので、そこを何とか今、様々な組織を動員してやったらどうだということがありまして、今こら辺の改革に、我々もかかろうと考えております。
- ・また、学力の方でも、英語についてはALTの活用等もいろいろと課題はあるのですが、進んできていることもあるのか、一定程度盛り返しつつあると思うのですが、その他の教科においてやはり課題もある中で、例えば、今小学校30人学級にもなります。これたぶんよその県とは違ったことだと思います。それに応じた教育のメソッドというのがあるのかもしれませんが。都会から引っ越してきた

人が、ほとんど複式学級に近いところにわざと引っ越してですね、子どもが少ないので、先生の目が届くから、きっと学力伸びるだろうと思った節があるのですが、全然協同性がないこともありまして、一向にうまくいっていないということも言われたこともあります。実はそうした特別支援学級でも生徒さんいない教室もある中で、どういうふうに教育をするかというのは、正直まだメソッドが確立されてないのかもしれませんが、大都市で幾ら頑張っている例を聞いても、我々も参考にならないのかもしれませんが。せっかく環境も整いつつあるので、そういうのを活かしてやっていくというのは確かに重要なと思いますし、ICTとかですね、それから学校全体での組織的な対応とか、今日もお話いろいろ出ましたけども、そうしたことをぜひ、鳥取流で追求した方がいいのではないかなと思います。

- ・そういう意味であともう1つ学力のことで、最近これを会議に繰り返していますが。若干視点が先祖返りしているかなと思われるのは、学力はデータじゃないのですよね。さっきグラフを見てもらいましたけれども、あれは、足し算の結果でありまして、実は教育はあくまでマイクロであります。一人一人の子どもたち、1つ1つの学級、そこが実は大事で、学力というのはそういうものの相対でデータにあらわれてくるのですが、そのマイクロのところを見逃してはいけないわけでありまして、ぜひ教育委員会の方でも地域ごとの分析や、或いはさらに学校ごと、学級ごと、こういうところを突き詰めていくと、初期の段階で我々はここで学級崩壊が起きていると、そういうことの下支えをしていくところからですね、学力の向上ということを考えていった時期もありました。特にああいふデータにあらわれてくるのは、追いつけなくなった子どもたちの影響がすごく数字に表れます。ですから、そこをどういうふうに盛り返して、丁寧なフォローしていくか、少人数学級的になればなるほど、実は我々のところはその辺得意なはずなのですけども、そこをうまくできているのかなというのが、最近の傾向なのかもしれません。ですからもう一度この会議始まった当初のころに戻り、そうした視点もぜひ教育委員会の方でも考えていただければよろしいかなというふうに思います。
- ・「落書の顔の大きく梅雨の唄」と高浜虚子が詠んでいますけれども、子どもたちの創造性、そういうものをぜひ、私たちが伸ばしていけるように、我々事務局もきちんとフォローして参りたいと思いますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

(中西部長)

- ・以上をもちまして、今年度の第1回目の鳥取県総合教育会議を終了いたします。